
暇な世界にさようなら

歯ぐき血まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な世界にさよなら

【Zコード】

27753Y

【作者名】

歯ぐき血まみれ

【あらすじ】

あー、最近することないよなー学校行つても授業とかまじつまんねえし。この世界は暇すぎる。ゆいいつの楽しみといえば家でやるオンラインネットゲームくらいだよまったく。はあ、いつそのこと別の世界に神様が送り出してくれないかなあ。この物語は5人のネットゲームプレーヤーが別世界に転生されてしまう感じです。若干キャラがチート性能だつたりするのでチート性能とかまじありえないわーとか思う人には向いてないかもです。作者はまだ未熟者ですので誤字脱字があつたら指摘してくれると嬉しいです。

カレの日常（前書き）

最初はらへんは主人公の日常回

「あー サム。 なんとかなんかなマジで?」

隣でオレの友人がそんなことをじつ

「なんとかできたらしてるつて・・・」

実際なんとかしてほしょなこの寒さ

いま携帯の天気予報的には うー

「コイツがさむがるのも無理はない。

「ヤーーいやヤー もうすぐテストだよなマジで」

やつこやそんなこともあつたな

まあ知つたといひで勉強なんかするわけがないが

「俺全つ然勉強してないからこんビヤベーかも的な?」

へえ、こいつ意外に勉強するタイプなのか。

こいつは守山達也 オレこと凜道 畠の同級生。去年高校に入学した時に前の席にいたのがコイツだ。

その時からコイツとはつるんでるからもう一年くらこの付き合っこなるのか

「じゃー早く帰つて勉強したほうがいいんじゃないのか？」

とつあえずテストが近いならオレとだらだらしゃべつてる時間なんてないはずだし

そう思つてオレはそいつ提案する。

「やうだなー、んじゃ帰るわ。また明日なー」

よし、オレも早く家に帰つて暖房の聞いた暖かい部屋でネットゲでもするか。

そういうながら特に急ぐまでもなくだらだらと家に帰る強であった。

親父はいない。事情はしらん。

まあそいらへんは母さんが話してくれる時をまとひとは思つ

別に知りたいわけでもないしな

そんなことを考えてる間に「毎温もれこあがつて暖かくなつてき
ている。

それで、ヒ。

そろそろ戻るするか。

そつ思いつつオレはインターネットをつけてオレがはまつているネ
ットゲームーセカンドワールドを起動する。

スタート画面。

そして始まりの街

このセカンドワールドは3Dのアクション系だ。

いろいろな職業があり、レベルアップによってもらえるポイントを
いろんなステータスにふつて自分専用のキャラクターをつくれる。

ちなみにオレのキャラ名はホタリンである。

昔言われてたあだ名を使ってみた。

もつと「マジな面前にじつよつて？」

ほつとけ

セーヒーいつものメンバーはいないかなあ

そう思い街をぶらぶら歩いてたら後ろから人影が近づいてくる

「やあ」

そして挨拶の声。

振り向く。

白いニット帽 服も同じく白系で統一されたディスシリーズ そして金髪

間違いない

「よっ、マカロニちゃん。他のみんなは？」

この友だちの名前はマカロニ

日常的に狩りや素材集めを共にする信用できる仲間である。（キリッ

それにマカロニさんの物理範囲攻撃ははんぱない。

ザ「モンスターの軍隊なら一撃で壊滅させられる

一部では一騎当十のマカロニとかいわれてるらしく

「まだ着てないみたいだね」

さわやかな笑顔でそう返事される

「んじゃ適当にクエストボードでもみといひば

「そうだね」

そんな会話をしていたら

「もおあんたたち着てたの？早いわね」

そんな声が聞こえてくる。

ちひつ

全身黒い龍騎士が着るような鎧に身をつつみ、頭にはティアラのようないものをのせている。

そして金髪のポーテル

「なんだコロネか」

「なんだつて何よー」

ちなみにこいつが着てる装備 集めるの大変だつたな

てこいつかわざわざ装備を確認なんかしなくても声でわかるんだけどね

「こつはコロネ。

コロネもオレのギルドメンバーの一人で職業はアサシン。相手の急所を突いて即死させたり相手から素材を盗んだりするのが主な戦闘スタイルだ。

てゆーか、普通に強い。

「んで、あんたたちなにしてたのよ」

「ああ、暇だから何か適当にクエストでもこいつかなってね

「なるほどね」

2人が会話してる間オレはクエストボードに注目していた。

このクエストボードといわれる板からは様々なクエストを受けることができる。

まあよしうまじいにこいくか決めるところみたいな？

「うーん、素材集めはめんどくさいから討伐系にしてくんね？」

「そうだねえ・・・おつと」

マカローさんが何かにきずいたようだ。

オレもマカローさんが見ている方向を見る。

そこにはよく知ったヤツラがいた

「お、アルスとリサちゃん」

「そうみたいだね」

「お、こんなにちわー。ちょうどいまどこにいつか迷つてたところだつたんだぜ」

「よー。」

「…………。」

元気な挨拶を返してくれたのはリサ

なにかと綺麗な聖騎士装備に身をつつみ、背中には長くも短くもない剣を一本収納している

本人いわくかなりのレアアイテムでちょーかるいよーとのこと

みずいろの髪をツインテールに結んであり、かなり幼く見える

そして何もいわす腕を振つてあいさつしたのがアルス。

いわずもかな超無口である。

だがしかし彼の防御力は理解不能なレベルまで達している。

全身西洋の鎧を装備しており、外見からどんな人間なのかあまりわからない

つていつか全く分からぬ

頭装備も鎧なので顔もわからないといつ謎極まりないヤツだ

一部の間ではびくともしない絶対的な防御力から世界の境界線 ア
ースライン とか呼ばれるらしい

なんとも大層な一つ名だが大袈裟な表現にはならないところがまた
すごい

つてか怖いよ

さて、これでそろつたなギルドメンバー

「とにかくいたいところ・・・・・・」

「ねえ知ってる?」

オレが言い終わる前にリサが乱入

「この前突然北の森の奥地に空まで続く塔が出現したらしくよー!」

なんだそれ、おもしろそうだな

「え、ほんと?おもしろそうね」

「そうだね、それでその情報はどう?」

マカローさんの質問にたいし

「私の友だちが森で見かけたらし—— せら、写真——」

と答える。

なるほど、詫惋付きひとつケか。ならもう決まりだな

「えじや、その塔へやつておひがい」

とこのオレの提案に

「やうだね」

とマカロニやんと

「わかつたわ」

「うねが返事し

「……。」

アルスが無言の同意

「おつけ——じやー私が案内するよー。」

そうして、とりあえずオレたちは好奇心とかそんなもんで塔に向かつた。

でも今にして思えばなんで不思議に思わなかつたのだろうか

アップデーターの報告もなしに出現した塔のことを。

ナレの口算（後書き）

誤字脱字や感想など報告してくれるとありがたいです。

終わる口論（前書き）

今回は戦闘かいてみましたー的な

「ん、気がついたようね」

皿を開ける

「なんだ」「ロロネカ」

「なんだってなによー。」

ベシッ

「んで、リリセビになんだ?」

「知らないわよー。」

ベシッ

あれ?

おかしい。

自分の服を見る。

魔法使いが着るようなベタなローブ

手のひらを握り、開く

オレはPS画面で激しい戦闘を楽しんでいたはずである

なのになんだ

この、自分そのものがゲームにはこちやつたよ的な展開
「つていうか、ここ、ゲームの中なのか？それにしても見たことない土地だが」

周りを見渡す。森である。

北の森に見えなくはないが周りに生えている木の種類が全く違う

「だから知らないわよー。」

「べし！」

「せつしきからこてえよー。なんで事ある！」と口に呴いてんだよオイ！」

「まつたぐじうなつてるのよ・・・・」

スルーカー。

だがたしかに異常事態だ。

とりあえずそここの木に腰掛けながら意識が飛ぶ前のことを思い出す

あのあとオレら五人は北の森にあるタワーへと足を運んだ。

北の森はそこまで敵も強くなく、ほぼ無傷で進むことができた

そして塔が見え、息を吸い込み、深呼吸して中に入った

あ、まだ説明してなかつたな。オレは職業魔法使い

別に何かに特化してるわけじゃない。

全ての魔法を万弁なく最強レベルまで強化している。

オールマイティってことかな？

だが何回も言つように特化してるわけじゃない

結界魔法の防御力がそこそこ強いレベルだが防御特化型のアルスと比べたら余裕で負ける

それにオレたちのPTはそれなりに廃人スペックな気もする

このゲーム内では名が結構知れ渡つている

よつな気もしなくもないような気がす・・・

「モンスターがいないわね・・・」

と、「」で口口ネの発言に思考と中断させられた

「かえつて不気味だよね」

口口ネの問いにマカロニさんが笑顔で答える

・・・絶対不気味がつてないだろ

まあたしかにおかしいな

「おばけとかでたりしてー」

と、リサがいたずらをする子供のような表情でこう

「わ、それそれそれ、そんなのいるわけないじゃないー。」

「口ネ、お前もしかして怖いのか？」

あまりのわかりやすさに意地悪をしたくなつたのでした

「ち、ちがうしー。」わくなこしー。つてこうか速く歩きなきこよー。ば
かー。」

「ははは、大丈夫だよ。ほら、もうくぐ頂上です、

そんな会話をしながら進んでこねとこつの中に頂上いらしき場所に
でた

正面に巨大な扉がある

「うわー、あやしー

「なんかかいてあるよー。」

リサがはじつて扉に書いてある文字を読む・・・

「うーん・・・漢字難しいな・・・とりあえず、てい！」

と、文字を読むのを1文字目で放棄し、扉を押す

「つてオイ！ だめだろ！ ていうかなにがとりあえずだよ。」

オレは我を忘れて思わず突っ込んでしまった

の
だ
が

「うわ、眩しい！」

扉の開いた先から今日烈な輝きが放たれて、オレのツツ「ミはスル
一された。

輝きがだんだん薄くなり、光の中に誰かが立っているのが確認できる
そして光がきえ、中の部屋に入る。

そしてみわたす。うわっ、ひる。

なんていうか・・・昔の神殿みたいな作りで若干暗いけど別に困るほどでもない

そして一番奥にまた扉

その扉の前に立つ一人の老人

NPCか？

「お主ら、新しい世界へ、行ってみたくはないか？」

・・・え？

田の前のNPCと思われるヤツがそんなことをいった

オレは振り向いてマカロニーに聞く

「どうこいつだと？」

「新しい世界・・・新しいダンジョンでも追加されたとかじゃない
？」

「なるほど、ありえるわね」

「よくわかんないけど、いいやつー」

ほんとテキトーだなーおい

まあ新しいダンジョンか・・・悪くない 悪くないぜー

オレは老人に振りかえり

「おう！行かせてくれー！」 そう叫んだ

「ほう、おもしろい。ならばコイツをおしたたら連れて行ってやる。

「

老人の目の前に超巨大な魔法陣が展開される

そしてそこからでてきたのは・・・

体長20メートルは余裕である前足の浮いている一本だらの漆黒の龍

・・・20メートル！？

でつか

なるほど・・・こいつを討伐すればいいのか

龍と対峙する。

オレと龍の距離10メートル。

まずは様子見だな

「ゆけ！」

老人がそう叫んだ。

龍の口になにやら炎のようなものが見え隠れしている。

・・・ブレスか！

その瞬間、龍の口からとてつもない勢いで炎が噴射される。

とりあえず、様子見として炎体制の着いた結界を一瞬にして2重に

はり、その結界に防御力上昇の補助魔法をかける

こんだけ硬くすればビームくらいよゅう・・

つて

は?

おかしい

オレの結界は一枚でロケットミサイルは防ぎきるくらいの強度があるはず

なのに

一瞬にして結界が消えさせオレに直撃・・・

するかと思ったその瞬間

アルスがオレとブレスの間に回り込み彼の持つ盾で防ぐ

炸裂音

そして爆風

さすがアルスだ。オレの結界をも消しとばす威力をもともせずに受け止めやがった！

アルスがこちらに腕を突き出して親指を突き出している

攻撃はまかせる……。そういうふうに見える

つつかなにあの余裕。

「盗賊スキル 影分身！」

うしろで技名「ホール

コロネの得意技影分身。コロネが次々と分身して10人ほどに分裂。そしてそれぞれがさまざま方向に散らばり、クナイや巨大な手裏剣などをかまえ……一斉攻撃！

空中から、真正面から、左右からクナイや手裏剣などが集中的に浴びせられる

だがそのどれもが鱗にはじかれ傷一つ付けられていない

「うそ……！」

「うおりやあああああ

リサが両剣を構え

龍の攻撃をよけて……

足に向かつて猛烈な連続攻撃を放つ

剣が視覚では認知できない速さで動いているのか剣がかすんで見える。

龍の意識がリサに向けられた瞬間

「いですよ…魔剣ハルバード！」

「攻撃上昇スキル発動！」

「ゴオオオオオオオオオとマカロニさんを待とうオーラの濃さが跳ね上がり

マカロニさんの腕に巨大なハルバード

2メートルちよいあるあの剣は単体攻撃専用で、魔力を注ぐことで攻撃力が跳ね上がる

続いて技名「ホール・インパクトストライク！」

ストライクインパクト。通常攻撃の10倍だけ？とりあえずそこはかとなく強い打撃攻撃のはずである。それに攻撃上昇スキルつかつてるからきっと軽く尻餅くらい着くんじゃないかあの龍？

巨大なハルバードを高々と振りかぶり

龍の頭めがけて…

激突

そして一度目の炸裂音

だが今回はマカロニさんの攻撃によるものだ

そして続いて爆風

龍が衝撃に耐えきれず前足を着く

龍が立っていた場所を中心に放射線状に地面にヒビがはしり、小規模なクレーターを作る

砂煙が舞い、マカローさんが飛び下がり、ロロロネもリサも戻つて来る

砂煙が張れ・・・そこには現れた龍の頭の鱗にヒビが入つていた。

グギュウウウウウウウウウウ

龍がぶちぎれたとばかりの咆哮を吐きだす

なるほど、つまりあのヒビが入つてている場所がいま一番もろい

そこを集中攻撃すれば・・・

「マカローちゃん・リサー！」

「やうだね」

「おっけい！」

どうやらアイコンタクトで理解できたらしい。

しびれを切らしたように龍がものすごい速さで突進してきた

「重力魔法グラビトンー！」

オレの重力魔法グラビトンは相手にかかる重力を増やし、動きを制限するというものだ

龍は攻撃主がホタリングだとさすがに、固まつた姿勢のままプレスをはく

すかさずアルスが盾で防ぐ

そしてマカローさんが技名を叫ぶ

「範囲攻撃上昇スキル発動！」

これでマカロー含むトリサの攻撃力が飛躍的に上昇

ついでリサの攻撃

「双剣使スキル 百烈斬！」

やく5秒間で100ちよつとの斬撃を放ち龍の頭部に命中する

よし、頭部の鱗がもうほとんどついてないつえに血が滴つてている

いける！

そしてマカローさんがハルバードを肩に担ぎ

「ジャッジメント・・・」

マカローさんが技名をしゃべりながらジャンプし・・・

もはや鱗がはがれ血まみれの龍の頭へ

「インパクト！」

大爆発にもにた衝撃がオレの身体を虫ケラのようにふきとばす

砂煙が張れ、そこにいたのは

ハルバードを振りおろした後のようなマカロニちゃん

そこに立つ龍

静寂。

スウっと龍の頭から縦にラインがはしり

全身から血を吹き出しながら無数のポリゴン状となつて消えていった・・・。

「よつしやあああ！」

「やつたわ！」

「イエ――――..」

「あはは、かつちやつたね

「・・・・。」

いやー一時は死ぬかと思ったぜ

オレは笛とハイタッチしてこむといひで、それがの老人がきた

「なるほど・・・つむ、よみこ。ではむりにある門をぐるがいい。」

オレたちは門をぐるがいた。

中の部屋はわざの部屋のように広くなく、やいからんの学校の教室よつちよつとせまこくらこの広が

その部屋の中心の空中に停滯し、なおもゆらめながら輝く光

転送ゲートみたいだな

このヤカンドワールドといづゲームには転送ゲートとこつものがあり、

街の中央やダンジョンのボス部屋の後などにあり、街に戻ることができるうえ、他の街にも行けるといつ

非常に便利なしるものである

でもこの転送ゲートの輝きたたハンパないな

まぶしこつて

「最初の輝きはこれね」

「ロボがこいつ。なるほど

そしてオレ達5人は順番に光の中へと飛び込んで行った

そしてそこで意識が途切れる

回想終了

「あーなるほど、老人の言つてた新しい世界つて別世界のことか?」

「ロネ元囁つ。

「やつぱつそうなるよな・・・」

「もう意味わかんないわよー。」

「まあ落ち着けつてオイ

ベシッ

「いやだから痛こつて!」

「とつあえずはやく仲間と合流しなきも・・・」

「やつぱつわけで、適切に森をわきよつホタリンとロネであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753y/>

暇な世界にさようなら

2011年11月23日16時54分発行